斎藤英喜編

『文学と魔術の饗宴　日本編』

小鳥遊書房、2024 年

星　優也

HOSHI Yuya

I　研究内容

専攻は歴史学・民俗学。これまで神仏信仰の歴史について、主に中世から近世の展開を神話や儀礼、芸能に焦点を当てて研究してきた。近年は、いけばなを始め「伝統文化」の歴史についても研究している。主著に『中世神祇講式の文化史』（法藏館、2023 年 3 月）、共編著に『〈学知史〉から近現代を問い直す』（田中聡・斎藤英喜・山下久夫共編）有志舎、2024 年 4 月。

II　内容紹介

『文学と魔術の饗宴』という魅惑的なタイトルの本書は、編者である神話研究者の斎藤英喜氏をはじめ、10 名の執筆者によって編まれた独特な論集である。帯には「頁を開いて、文学の魔窟へ！」とあり、執筆者も文学や思想史の研究者から、小説家の芦花公園氏も加えた他にない構成である。まさに饗宴といえよう。表紙や扉の渦巻きが更に引き込んでいく。

それにしても、文学と魔術の〝饗宴〟とはどういうことか。文学と魔術がなぜ同じ場に居られることができるのか。書名からいくつもの疑問が浮かぶだろうが、本書の各章は、文学と魔術は饗宴し得ないという発想そのものが、いかに近代的な認識に捉われているのかを突きつける。関係がないと思う要素を方法的に結び付け、そこから無意識にある近代知を相対化させて新たな視界を開く。編者である斎藤英喜氏らしい論集ともいえよう。

どうしても触れねばならないことだが、編者の斎藤英喜氏は、本書が刊行される直前の 2024 年 9 月 4 日に急逝され、はからずも本書は斎藤氏最後の編著書になった。斎藤氏は、古代文学研究から『古事記』論を展開しつつ、神話の通史的な変貌を古代から近代まで研究してきた。同時に高知県香美市物部町（旧物部村）の民間宗教いざなぎ流の調査を 30 年近くに渡り続け、いざなぎ流の祭祀実践の世界を明らかにし、そこから陰陽道の宗教性に迫った。『文学と魔術の饗宴』という本書の題は、いかにも斎藤氏の研究者人生を表しているともいえよう。しかし、本書は、そのような個人史にとどまらない。生涯をかけて文学と魔術の饗宴を実践した編者の斎藤氏をはじめ、神戸神話・神話学研究会（神神神）のメンバーを中心とする上代文学や中世文学、近世文学、近現代文学、近代思想史、英文学、比較文化学研究から小説家に至る、幅広くかつ普遍的な方法へ開いた論集といえよう。以下、目次を紹介する。

プロローグ（斎藤英喜）
第一章 中世の物語と呪術・身体――御伽草子『御曹司島渡』と兵法書「虎之巻」をめぐって――（金沢英之）
第二章 護符の神学――中世神道と魔術の世界――（小川豊生）
第三章『老媼茶話』の魔術（南郷晃子）
第四章 ラフカディオ・ハーンに誘われて――魔術・心霊・怪談、そして異端神道――（斎藤英喜）
第五章 西洋近代魔術の到来――井上勤訳『龍動鬼談』をめぐって――（一柳廣孝）
第六章 三島由紀夫の超常論理――『美しい星』における円盤学と占星学――（梶尾文武）
第七章 崩れ堕つ天地のまなか――原民喜の幻視における魔術的実践――（清川祥恵）
第八章『鬼滅の刃』における「鬼」たちの魔術的力――鬼の始祖・鬼舞辻無惨をめぐって――（植朗子）
コラム①「法ごと」の消長――佐々木喜善の「魔法」をめぐって――（渡勇輝）
コラム②虚構の中で魔術を使う（芦花公園）

以上が本書の構成である。８本の論考と２本のコラムで成り立ち、他にない極めて独特の内容である。タイトルにもそれぞれ、呪術、魔術、超常、魔法……と、一見手に負えないかと思われるが然に非ず。各自の研究蓄積に裏打ちされた方法論として、それらの概念が使いこなされる。まさに本稿において執筆者は、さながら〝魔術使い〟である。

斎藤氏のプロローグは、各章とコラムの解説があり極めて有益だが、「これは編者の斎藤の「読み」でもある」（８頁）と断りを入れるように、プロローグそのものも一つの章に相当するほど濃い。アロイジウス・ベルトラン『夜のガスパール』（岩波文庫）の一節をエピグラフに採用し、人類学や民俗学の「魔術」定義（「非合理的、超常的な力を駆使するテクネー」３頁）を紹介した後それらとの相違を示す。斎藤氏は、「本書で扱う「魔術」は、そうした認識群とは異なっている。ここで取り上げる魔術は、「文学」と密接なつながりをもっていくからだ」（同）とする。また、文学が魔術と不可分だったことや「魔術の呪文、呪符、あるいは魔術の由来を説く神話のなかに「文学」が胚胎していたというように……」（４頁）と、より文学と魔術を結び付けていく。本書は、魔術の視点から文学を読み直す／読み替える試みでもあることが示される。

収められた各内容を見てみると、密教修法に基づく「大日の法」（虎之巻）の儀礼的身体をまとう御伽草子『御曹司島渡』の源義経（金沢）、霊符から西洋の魔術書と共振する吉田兼倶の宗教世界（小川）、近世の奇談集『老媼茶話』の果心居士らによる「魔術」「魔法」などの異端が持つ表現の重層性（南郷）、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）『怪談』の基層にある降霊術や心霊主義の魔術的世界（斎藤）、医療や科学と未分化な催眠術（メスメリズム）の「魔術」に基づく井上勤の訳書『龍動鬼談』の世界（一柳）、三島由紀夫の小説『美しい星』の背後にある冷戦時代の円盤研究（ユーフォロジー）と占星学知（梶尾）、原民喜による被爆体験の詩に見える魔術的言語を用いた凄惨な現実の表現（清川）、吾峠呼世晴による漫画『鬼滅の刃』の薬「青い彼岸花」による鬼化と人間の捕食という魔術の悲劇性（植）が配置される。さらに２本のコラムとしては、柳田国男『遠野物語』の話者として知られる佐々木喜善の小説「魔法」から、民間巫者の呪的世界との関係（渡）が指摘され、最後にはエッセイとして、小説家の経験から魔術を表現する際に説得性のあるリアリティがいかに必要であるかを、デモンストレーションを交えて具体的に示される（芦花）。

紙幅の関係上、内容紹介として不十分だが、各章全て力作が揃っている。また何より、本書で扱われる御伽草子、神道書、奇談書、小泉八雲の『怪談』、明治の訳書、三島由紀夫の小説、原民喜の詩、

Ｊコミック、大衆小説、そしてホラー小説の技法と、文学研究において扱われてきたジャンルが魔術と不可分であり、それらを通した読みがいかに豊かな世界を切り開くかが説得力をもって示される。立場や方法が異なる執筆者陣であるが、文字通り本書は、魔術と文学の〝饗宴〟が繰り広げられる。

ないものねだりを承知で付言すれば、中世から始まる本書には古代や上代のパートがなく、魔術から古代・上代をいかに読み替えていけるのかは課題である（すでにシャーマニズムなどの視点を取り入れた研究が出ている）。これは本書を受けて行う次への展望だろう。あらためて読み直すと、本書は魔術の視点から新たな文学史が編まれたとも言える。それは、歴史を叙述する方法に魔術が提示されたとも言い換えられよう。それならば、魔術から編まれる歴史とは何か。これは評者への課題でもある。

もう一つ、魔術という概念についても本書では、各章で使い方は異なる。もちろん、本書は統一した魔術論を目指すものではなく、生前の斎藤氏から「自由に書いてもらうようにした」と語っていたと評者も記憶している。それだけに、ここで展開された魔術と呪術、妖術、邪術、さらに言えば近代の心霊や宗教性との違いは何か。これまでの魔術概念への批判的な視点については、各論の比重も異なる。しかし、このことは、魔術という読み方の奥深さと豊かさが示されたともいえよう。まさしく本書は、魔術の視点から文学の読み替え／文学から魔術の読み替えを試みた先駆である。魔法書は紐解かれたのだ。